信じるーこの言葉では大抵、それほどはっきりとは知ることのできない何かについて、確実ではないが本当だと思うということが意味される。ドイツ語では「明日は良い天気だと思う」といった言い回しの時に、この「信じる（グラウベン）」という言葉が使われる。

　ところが、「私はこの人を信じる」という時は全く別である！この言葉がただの何となくそう言われるのではなくて、たぶん何らかの真剣な、当の人間にとって決定的な人生状況の中で言われる場合には、この「信じる」という言葉は一つの内的な行為を表している。それは二つの事を指し示すだろう。一つは、私が相手の人間の本質を、「信じる」ことのできるように知覚した、ということである。ここでは単に外的な事実にだけでなく、その人についての内的で「直観的な」把握に支えられた、より深い関係性が生まれてくる。そして第二に、ここで言われた「信じる」という言葉は、相手の本質に対する信念をもち、それを支持する、という意味であり、単にその存在を知覚するとか理解するとかということを越えているのである。

　たとえば一人の教師が一人の生徒を見て、「私は彼を信じる」と言う時、そこでは単に「私は彼を知っているし、理解している」と言う以上のことが、表現されている。ここでの「信じる」ということの中には、知っていてそして理解している（－特定の性質を知っているというようなー）ことも含まれているのだが、しかしそれを超えて、この生徒は自分の素質を良い方向に発展させることができるのだという、積極的な信頼感が生きているのである。

　「信じる」ことには、より深い知覚と、この知覚されたものに対して信念をもつという、二重の意味合いがある。それは宗教的な意味において、この言葉でしか表現し得ないものにまで通じている。本当に信じることの中には、外的にはとらえられない諸関連についての、予感を伴う一つの確信が生きている。だからエミール・ボックは「信仰」という意味のギリシア語を、折に触れて「心で見る力」と訳している。信じることの中には、より深い諸関連、本質的なものを、直観的にとらえる、「心で見る」という力が働いている。さらに信仰は知覚であるにとどまらず、何かに作用するようにもなる。信仰は生きる姿勢になり、また信じるものの内容と内的に結びつくことにもなっていく。誰かが本当に神を「信じる」時、それは、運命に対するその人の信頼の中に、そして最終的には、その人の日常的な態度の中にまで、現れてくるにちがいない。そうならない場合、信仰はその人に内在する力をまだ発展させていないことになる。

　信じることの中に生きているこの力を、「何かに結びつこうとすること」と表現できるだろう。この結びつこうとする姿勢は、既に「私はこの生徒を信じる」という言葉の中に暗示されている。教師はいわばその生徒の側に立ち、彼に対して何らかの結びつきの関係に入る。これは「私は神を信じる」と言った場合にはさらに強くなる。もしこの言葉が真実であるならば、それは私の人生の他の部分に結果をもたらすはずである。そこには単に、「私には神が存在するにちがいないことは判る」とか、「私は神が存在することを知っている」などと言う時よりも、もっと多くの内容が含まれている。「私は神を信じる」と言う時、私はその信仰の中で言われている者の側に踏み入る。私はその者と内的に結ばれる。私はいわば、私の内的実存をもって、その者の方へと渡って行くのである。

　信仰のこの側面は、私が内的な危機やあるいはまた外的な苦難に陥る時、働きはじめる。その時、私が信仰の中で、私を本当に神的なものに結びつけ、そして私に内的外的に耐える力を与えてくれる内的な結び付きに達しているかどうかがわかる。信仰が充分に深いものなら、そこにはこの耐える力が内在している。この小冊子では、信仰の持つ、この耐える力を呼び起こし発展させることを取り扱う。ゆえにここでは、「いかに私はそれを理解すべきか？」という問いはあまり問題とはならない。それは、（さきにも書いたように）他の出版物の中に答えを見つけることができる。ここでは内容に関連して必要である限りにおいて、触れることにする。私たちにとって大事なのは、もし、信条に述べられている事が真実なら、それは私の人生にとって、どんな意味があるのか？－という問いである。私たちはゆえに、認識の問題から実存の問題へと、あるいは別な言い方をするなら、認識から人生における信念へ、信仰が持つ結びつきの力へと、移ってゆく。

　理解するということに信仰をつけ加えるというのが何を意味するのかが、ここではっきりしてくるだろう。私が神は存在するということを次第に理解することを学んでも、それでもなお長い間、私は神を信じる必要はないのである。かつてミヒャエル・バウアーはこう言ったことがある。「悪魔も神が存在することを知っている。しかし、神を信じてはいない」。人間的な領域の中からもう一度、例をあげてみよう。教師はその生徒を知ることも、理解することもできる。しかし彼を信じるには、もっと深く彼に関与することが必要となる。宗教の領域ではこの関与、この結びつきが、霊的な事柄についての単なる知識に本当につけ加わらねばならないのである。そうしてはじめて私たちが神、キリスト、救い等々について知っていたり、あるいは知っていると思っている事が、私たちの全人生に対して働きかけ、そして実りをもたらすようになりはじめる。そして、心の関与がつけ加わる時、知るということ自体も変わってゆく。それは、私たちの人生に現実的なつながりを持つようになる。

　霊的世界とその存在者たちについて、ふたたび多くのことが知られるようになった時代には、このような知識に、結びつきの力や積極的関与が欠ける危険があるということを、隠すつもりはない。私たちは知っているのだが、しかし知っていることを信じてはいない。そしてそれによって遂には知識自体も力を失うことになる。キリスト教の基本的真理に関して、この危険を乗り越えるために、ここでいくつかの道を概略的にも示すように努めたい。

　他方で、もう一度はっきり言うべきことがある。それは霊的世界についての本当の知識なしには、今日また信仰の力も失われるということである。「単なる」「盲目的な信仰」では、今日十分でありえない。一人一人の人間の中に生きている信仰の活動的力は、認識の支えがないならば、迷信や間違った考えへと退化していかざるを得ないだろう。これは今日、様々なかたちで現れて来ている。

　真の霊的認識は人間の心を信仰の力にも開く。それは信仰に確実さを与え、「心で見る力」にそのために必要な光を与えてくれる。霊認識は、人間のもっとも深い内面の積極的関与である信仰を、ふたたび可能にするのである。

（4．理解できても、なおさらに神じねばならないか？　ハンス＝ヴェルナー・シュレーダー「キリスト者への道・クレド」pp．21－24）